

研究開発完了報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

住所 岡山県岡山市北区内山下2-4-6
管理機関名 岡山県教育委員会
代表者名 教育長 鍵本 芳明

令和3年度地域との協働による高等学校教育改革推進事業に係る研究開発完了報告書を、下記により提出します。

記

1 事業の実施期間

令和3年4月1日(契約締結日)～令和4年3月31日

2 指定校名・類型

学校名 岡山県立和気閑谷高等学校
学校長名 藤岡 隆幸
類型 地域魅力化型

3 研究開発名 「恕」の精神を持って地域と協働する探究人の包括的育成

4 研究開発概要

本構想は、指定校が規定する「地域と協働する探究人」育成を目的とし、卒業までに身につけさせたい資質・能力「7つのチカラ」の向上を目標とする。そのために、(ア)各教科・科目における地域協働カリキュラム、(イ)地域協働デュアルシステムカリキュラム、(ウ)総合的な探究の時間における地域協働カリキュラム、(エ)各教科・科目等と連動する課外活動、(オ) (ア)～(エ)を支援する体制の構築の5点について研究開発する。

5 学校設定教科・科目の開設、教育課程の特例の活用の有無

- ・学校設定教科・科目 開設している ・ 開設していない
- ・教育課程の特例の活用 活用している ・ 活用していない

6 運営指導委員会の体制

氏名	所属・職	備考
石原 達也	岡山NPOセンター 代表理事	R1～R3
岡山 一郎	山陽新聞社編集局 編集委員室長	R1～R3
神崎 浩二	岡山県経済団体連絡協議会 事務局長	R1～R3
中山 尚美	岡山県総合政策局 地方創生推進室長	R3
徳岡 卓也	ベネッセコーポレーション 学校カンパニー 西日本教育支援推進部 中四国支社長	R2～R3
前田 芳男	東海大学経営学部観光ビジネス学科 教授	R1～R3

7 高等学校と地域との協働によるコンソーシアムの体制

機関名	機関の代表者
和気町	町 長・草加 信義
和気町教育委員会	教育長・徳永 昭伸
和気商工会	会 長・川上 健二
赤磐市	市 長・友實 武則

赤磐市教育委員会	教育長・土井原 康文
赤磐商工会	副会長・中原 哲哉
備前市	市長・吉村 武司
備前市教育委員会	教育長・松畑 熙一
備前商工会議所	会 頭・寺尾 俊郎
備前東商工会	会 長・横山 忠彦
特別史跡旧閑谷学校顕彰保存会	理事長・國友 道一
岡山大学	教師教育開発センター副センター長・高旗 浩志
和気閑谷高等学校	校 長・藤岡 隆幸
和気閑谷高等学校PTA	会 長・小林 雅代
和気閑谷高等学校同窓会	会 長・内山 登

8 カリキュラム開発等専門家、海外交流アドバイザー、地域協働学習実施支援員

分類	氏名	所属・職	雇用形態
カリキュラム開発等専門家	江森 真矢子	一般社団法人まなびと代表理事	週2日6時間
カリキュラム開発等専門家	梅村 竜矢	和気町立和気中学校非常勤講師	週2日6時間
地域協働学習実施支援員	松穂 亜花音	和気町地域おこし協力隊・支援職員	常勤

9 管理機関の取組・支援実績

(1) 実施日程

業務項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
県内先進実践校との連携・協力体制の構築		○							○			
運営指導委員会								○			○	

(2) 実績の説明

①管理機関（コンソーシアム含む）における主体的な取組について

地域と連携した教育活動を推進するとともに、和気閑谷高等学校をはじめとした地域協働先進校の取組の充実を図るため、次の取組を行った。

○ 地域協働先進校の連絡協議会の開催（令和3年5月27日）

県教育委員会では、和気閑谷高等学校をはじめとした、本県が定める適正規模（1学年4～8学級）を下回る1学年3学級の高校10校に対して、3学級規模の高校が地域との連携の在り方等を研究し、配置したコーディネーターを活用した地域との連携促進など、教育の質を確保した魅力づくりを図る高等学校魅力化推進事業（リージョナルモデル）を指定しており、これらの指定校の取組の充実を図るため、各指定校の担当教員及びコーディネーターを対象とした連絡協議会を5月に開催した。会の中では、参加校における特色を生かした活動内容及び今後の地域連携における持続可能な体制づくりについて共有した。その後、教員・コーディネーター別に分科会を実施し、小中学校や地域との連携内容、コーディネーターの業務など、テーマごとに意見交流を行った。本協議会を通じて、和気閑谷高等学校を含めた参加校の取組の参考となることに加え、地域連携担当教員やコーディネーターのつながりを構築することができた。

○ 「高校生探究フォーラム2021」の開催（令和3年12月27日）

和気閑谷高等学校の総合的な探究の時間「閑谷学」のように、外部との連携等によ

る特色ある探究学習の成果を発表するとともに、他校の取組を共有することで、高校生一人ひとりの夢を育む契機とするため、高校生自らが発表する場として、令和3年12月に「高校生探究フォーラム」を開催し、県立高校31校51グループの高校生が発表を行った。今年度は、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、発表会場を4部屋（ステージ発表：3会場、ポスターセッション会場：1会場）用意し、発表する51グループを3つの時間帯に分けることで、密を避けながら参集して行うことができた。発表校以外の参観希望者に対しては、ステージ発表3会場の様子をオンライン配信し、視聴できるようにした。多くのグループが、地域課題などをテーマに課題解決型学習に取り組んだ成果を発表するとともに、発表後に行われた学校間交流において、他校の生徒同士が探究学習について共有することができた。本フォーラムでは、高校生に社会とのつながりを意識させるため、企業等に幅広く参加を呼びかけ、当日は、高校生と企業関係者とのやりとりも多く見られた。発表した高校生からは、「知らない人の前で発表する大事さを知った」、「他校の取組を見て、今までとは違う視点で物事を考えることができた。」、「他校と交流する機会がなかったので、意見交換の場はありがたかった」などの感想があり、コロナ禍で、多くの学校が発表や交流の場が失われており、本フォーラムにおいてさまざまな発表を聞くことにより、高校生の今後の探究学習の参考にすることができた。

なお、本フォーラムは、和気閑谷高等学校を含めた地域協働先進校における取組の成果を、県下の高等学校間で共有し普及させることをねらいとすると同時に、地域協働先進校同士の学びの場と位置付けている。

②事業終了後の自走を見据えた取組について

ア コミュニティ・スクールの導入

令和元年度に県立学校初のコミュニティ・スクールを和気閑谷高等学校へ導入し、これまで構築したコンソーシアムを、より地域と協働した学校運営が行われる体制に整備した。地域の関係者などが、より学校運営に参画してもらうために、学校運営協議会において、スクール・ポリシーの策定等にも関わってもらうよう、県教育委員会からもお願いした。

イ 地域協働学習実施支援員の継続（コンソーシアム）

和気閑谷高等学校が所在する和気町との協定により、和気町から派遣された支援職員を地域協働学習実施支援員に指名することで、事業終了後も引き続き高等学校へ配置することが可能となり、学校における地域と協働した探究的な学びが継続できる。

③高等学校と地域の協働による取組に関する協定文書等の締結状況について

- ・和気町職員の岡山県立和気閑谷高等学校における職員支援協定（H26～）
- ・岡山商科大学と岡山県立和気閑谷高等学校との高大包括連携に関する協定（R1.7～）

10 研究開発の実績

(1) 実施日程

業務項目	実施期間（契約日 ～ 令和4年3月31日）											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
7つのチカラ育成の年間計画	シラバス・単元画列表作成			←		←		実施・検証		→		
学力向上に関する研究協議会			○					○				
パフォーマンス課題の実践報告	←			実践		→		掲載				
学校設定教科・科目「地域協働探究」	←			←		実施		→				
	←			←		新教育課程に向けて事前協議		→		→		

・2年次生「就業体験実習」					○							中止	中止
1年次生閑谷學													
・探究手法を学ぶ													
・グループ探究													
2年次生閑谷學													
・グループ探究													
・個人探究													
3年次生閑谷學													
・個人探究													
・卒業探究論文集													
探究学習発表会													
近隣高校等との探究学習交流													
コンソーシアム及び各部会													
・学校運営協議会													
・各部会													
・連絡会													
県内先進実践校との連携・協力体制の構築													
運営指導委員会													
地域協働事業成果発表会													
本研究開発専用のサイト開設													

(2) 実績の説明

① 研究開発の内容や地域課題研究の内容について

ア コンソーシアム及び各部会

今年度は、昨年度に引き続きオンラインや書面に会議形式を変更することもあったが、年度末までにそれぞれ3回の会議を行った。「学校運営協議会」では、今年度第1回会議でスクール・ポリシーの策定について貴重な意見を得た。「小中高接続部会」では、研究当初は地域全体でリーダー研修を行うことも考えていたが、実現可能性や継続性を重視して、昨年度から各校の要望に合った生徒会活動や部活動での交流を実践しており、次年度からは実績をもとに交流機会の一覧表を作成して小中学校に示していく。

「産学官連携部会」では、就業体験実習にかかわるカリキュラムづくりや探究学習での課題提示、フィールドワークの企画・運営等に関わっていただいた。「高大接続部会」では、探究学習の高度化等について助言をいただき、探究学習における3年間の成長イメージを整理して生徒・教員に示した。

イ 各教科・科目

身につけるべき資質・能力(=7つのチカラ)の到達点を生徒教師が共有することを目的として長期ルーブリックを策定し、昨年度から運用している。教員対象の授業工夫アンケート結果によると、各教科が提示した長期ルーブリックをもとに単元ルーブリックを作成して、長期ルーブリックに関連した評価を行っている教職員は、昨年度3割から今年度6割弱に増加し、活用が進んでいる。また、授業で「振り返り」を実践する教職員は8割弱から9割強、ルーブリックによる評価を実践する教職員は7割から8割

と、いずれも増加している。

また、本校では学習意欲を上げるために、生徒が興味を持てるような実社会に関連した題材を取り上げたパフォーマンス課題を用いた授業を行っている。今年度は特に教科横断の授業や一人一台端末を活用した授業を組み立てた。本校の授業では「授業の額縁」である「目標」と「手順」の提示や、パフォーマンス課題の実践に関しては、ほぼ全教員が実施している。「目標」と「手順」を提示することの手応えや意義が実感できていると答える教員は昨年度の半数弱から、6割弱と微増した。月例の職員会議を利用して、教職員の学び合いの機会を意識的に行ったことが奏功していると考えられる。教科横断型の授業実践に関しても、「実践した」が7割以上となり、昨年度の3割から劇的な増加となっている。実践報告は本校ホームページに掲載している。

今年度新設した学校設定教科・科目「地域協働探究」は、高校卒業後、社会に出る前に「働く」ということを体験からしっかり考えさせるという目的で、長期の就業体験実習を取り入れることにした。3日間のインターンシップでは体験できないことを学び、ミスマッチを防いで離職率を減らすことにもつながる。また、進学希望者であってもいくつかの異なる事業所での就業体験を通して、社会のニーズや自分の適性を知り、将来について考えることができる。今年度は、学科を問わず3年次就職希望者の中から13名が受講した。この科目では、「体験を経験に変える」をキーワードにし、体験で得たことを言語化し自分の経験として蓄積していくことをねらいとしている。主には、金曜日に体験活動を行い、翌週の火曜日は振り返りの時間とした。振り返りは4～5名の生徒に対して教員1名を配置し、対話形式で行った。教員が問いかけながら振り返りをするスタイルから、段階的に生徒自身がファシリテートできるよう問いかけの仕方等を指導することで、生徒同士でもお互いに問いかけ合うことができるようになった。この授業の中では、活動後の振り返りの時間がとても重要であったと言える。

ウ 関谷學

事業1年目の令和元年度は、1年次探究基礎で「高大接続部会」委員でもある岡山商科大学の三好教授から、探究技法の講義を受けたり、2年次は、探究テーマを決めるにあたって、「産学官連携部会」を通して、備前市・赤磐市・和気町の行政・教育委員会・商工会の方から、高校生に考えて欲しい具体的な地域課題を提供していただき、その課題を参考に、各自興味のあるテーマを設定してチーム分けを行ったりするなど、計画的に外部の方に関わっていただく機会を増加させた。しかし、学年ごとで各単元が終了するため、各学年にテーマ設定がまかされるようになり継続性が担保されないことや、個人探究を行う3年次では特に探究期間が短い内容が深まりにくいという課題があったため、事業2年目から、4つの単元（単元Ⅰ探究基礎、単元Ⅱ地域探究（グループ探究）、単元Ⅲ未来探究（個人探究）、単元Ⅳ卒業論文）に編成し、学年をまたいで長期間で単元設定するように変更した。そして、単元Ⅱの地域探究であるグループ探究は、2年次が活動した内容を1年次が引き継ぐという形態に変え、テーマに継続性を持たせた。また、単元Ⅲの未来探究である個人探究は、2年次の2学期からスタートするため、じっくりと探究活動ができ、探究した内容を進路決定につなげることができた。

令和2年度以降は、5つのゼミ（健康、教育、歴史・文化、ビジネス、自然科学）に分かれて、グループで2市1町の地域課題を解決するテーマ別探究活動を行った。講師として多くの外部人材に関わっていただいている。生徒は地域の資源に触れることで、地域に興味を持ったり、これまでやったことのない体験をすることで、自信をつけたりしている。講師となる地域の方はご都合のつくときに随時関わってくださり、毎時間学校へ来てくださる方もいた。

②地域との協働による探究的な学びを実現する学習内容の教育課程内における位置付け（各教科・科目や総合的な探究の時間、学校設定教科・科目等）

ア 各教科・科目

合科的・教科横断的なパフォーマンス課題、地元の特長的な教育資源の活用、地元企業と連携した実習や本物に触れる体験を取り入れた単元開発など、社会に開かれたカリ

キュラム開発を目指し、学ぶ値打ちのある学習課題を核とした単元を創りホームページで公開した。

デュアルシステムカリキュラム開発については、学校設定教科「地域協働探究」を設置し、令和3年度～令和5年度にかけて、順次、地域での就業体験実習や地域貢献活動を行う新科目を開発する。令和元・2年度入学生は、3年次に就職希望者を対象にした選択科目として「地域協働探究」（2単位）を、令和3年度入学生からは、普通科協働探究系を新設し、全員履修科目として、2年次に「地域協働探究 α」（5単位）、3年次に「地域協働探究 β」（6単位）を開発した。また、令和元・2年度入学生の2年次の就職希望者を対象に、夏期・冬期・春期に各5日間の就業体験実習を実施し、「学校外の学修」として各期1単位認定する予定であったが、今年度は新型コロナウイルス感染症の影響により夏期のみ実施し、冬期・春期は中止とした。

イ 閑谷學

生徒の探究学習の専門性や新規性を高めるため、探究学習を進めるプロセスにおいて、生徒が大学教授や大学院生等大学関係者、地元企業・自治体の従業員・職員等から適宜指導を受けられる体制の構築を目指した。グループ探究では、グループごとに地域の協力者を依頼し、フィールドワークや通常の授業にも参加していただくことで、専門的な意見をを得ることができた。個人探究では、問いの設定の場面で、「高大接続部会」を通して大学教授から助言をいただき、指導に生かすことができた。

③地域との協働による探究的な学びを取り入れた各科目等における学習を相互に関連させ、教科等横断的な学習とする取組について

教務課研究開発室が中心となり、授業改善の手立てとして、今年度は特に ICT の活用と教科等横断的な学習の実践に取り組み、本校ホームページに実践事例を載せている。例えば、1年次「コミュニケーション英語Ⅰ」では、英語の受身と日本語の受身を比較して両言語の文化的背景を知り、後日、「国語総合」で、別の視点から受身を取り扱い、学びを深めるといった、コンテンツ型だけではなくコンピテンシー型の教科横断に取り組むことも模索した。

④地域との協働による探究的な学びを実現するためのカリキュラム・マネジメントの推進体制

校内のコア組織である企画委員会が本校学校運営協議会の下部組織である3部会と協働してカリキュラムの内容について立案し、校内組織の地域協働プロジェクト推進委員会で協議し、学校運営協議会で承認する形で実施した。

校内組織の企画委員会は時程内に入れて毎週開催したが、2市1町の実務担当者とは本校関係者とは構成される打合せ会「連絡会」は実施できなかった。

⑤学校全体の研究開発体制について（教師の役割、それを支援する体制について）

企画主任は、学校運営協議会の日程を展望しつつ、下部組織である3部会から具体的な提案がなされるよう調整し、本研究開発を統括的に推進した。3部会主担当者及びカリキュラム開発等専門家と協議し、地域と協働するためのカリキュラムの改善策をまとめるなど本研究開発を主導する役割と、カリキュラム開発等専門家や行政・企業・大学等の各主体等、外部との連絡・調整に当たる役割を果たすことができた。

3部会主担当者は、小中高接続・産学官連携・高大接続の各部会に所属するステークホルダーのメリットと本校のメリットを両方生み出せるよう部会を運営した。

研究開発室は、学力向上推進の主担当として生徒の学習活動の改善を図るとともに、学力向上に関する研究協議や授業アンケートを行い、その成果と課題をまとめた。

探究学習委員会（閑谷學・LHR委員会を改称）は、カリキュラム開発等専門家や地域協働学習実施支援員も出席する企画委員会が兼ね、「総合的な探究の時間」の企画・運営、年次ごとの年間計画の管理や「地域協働探究」のカリキュラム検討を行った。

⑥カリキュラム開発等専門家、海外交流アドバイザー及び地域協働学習実施支援員の学校内における位置付けについて

ア カリキュラム開発等専門家

・江森真矢子氏

活動内容
企画委員会の出席、報告冊子の執筆・編集 ・事業総括会議の運営、議事録の作成
学校設定教科・科目「地域協働探究」について校内協議 ・校内協議の運営、議事録の作成
高大接続部会の運営 ・部会主担当と会議内容について協議 ・閑谷學担当者と課題整理、次年度に向けての検討
学校運営協議会、運営指導委員会の出席 ・学校運営協議会の資料と議事録の作成
総合的な探究の時間「閑谷學」の授業サポート ・1年次生のフィールドワーク先の調整 ・探究学習発表会、学習成果発表会の出席

・梅村竜矢氏

活動内容
報告冊子の執筆・編集
学校設定教科・科目「地域協働探究」について校内協議 ・職員会議に出席 新科目について説明と協議 ・授業担当（準備、指導、評価）
就業体験実習について企業訪問 ・受入依頼 ・実習プログラムについてヒアリング
産学官連携部会の運営 ・学校設定教科・科目「地域協働探究」について協議
総合的な探究の時間「閑谷學」（グループ探究）の授業サポート ・1・2年次生の授業内容について担当者と協議 ・1・2年次生のフィールドワーク指導 ・探究学習発表会、学習成果発表会の出席

イ 地域協働学習実施支援員

・松穂亜花音氏

活動内容
企画委員会の出席、報告冊子の執筆・編集
2年次団（学年付）、進路指導課所属、英語研究部顧問
総合的な探究の時間「閑谷學」（全学年）の授業サポート ・全学年の「閑谷學」の企画立案、指導 ・探究学習発表会、学習成果発表会の運営
課外活動（イルミネーション・ボランティア等）の企画運営サポート ・外部との交渉、校内の調整、生徒の指導
小中高接続部会の運営 ・部会主担当と会議内容について協議
学校運営協議会、運営指導委員会の出席

⑦学校長の下で、研究開発の進捗管理を行い、定期的な確認や成果の検証・評価等を通じ、計画・方法を改善していく仕組みについて

ア 高校魅力化評価システム（生徒、大人）

9月に全校生徒、教職員、地域の大人（コンソーシアム関係者）にアンケートを実施した。これからの社会で求められる4つの資質・能力（主体性、協働性、探究性、社会性）を5つの側面（①学習活動②学習環境③生徒の自己認識④生徒の行動実績⑤生徒の満足度）から見て、3年間の推移や他地域との比較をした結果、現3年次生の自己認識に特に変化があったものは「主体性」に関わる項目で、自己肯定感・自己有用感、行動力、課題

設定力が高まっていることが見えた。また、①学習活動と②学習環境は他地域に比べて4つの資質・能力すべてにおいて肯定的回答が高く、地域協働の機会や環境が整っており、「学校外のいろいろな人に話を聞きに行く」など生徒が地域との関わりを持つ中で主体性を高めていったものと思われる。

イ 7つのチカラアンケート（生徒）

毎年、探究学習発表会後に行っている「7つのチカラアンケート」で、現3年次生の1年次から3年次までの結果で特に推移があったものとして、「やるべきことや問題があるとき、今の自分の状況を分析する」「実行した後は、それが確実にできたかを見直し、改善する」「よりよい解決策を見つけるために、できるだけ多くの情報を集める」「自分の考えや気持ちをうまく表現できる」「人に対して、自分から働きかけて、理解や協力を得る」が挙げられる。これらの項目は、概ね自らの働きかけによるものであり、その伸びは、日々の本校での学校生活をはじめ、地域との関わりをベースとした「地域学」での主体的（能動的）な学びが大きく影響しているものと考えられる。

ウ 学校評価アンケート（生徒、保護者、教職員）

11月下旬に全校生徒、保護者、教職員にアンケートを実施した。学校生活への充実感を問う項目の経年変化をみるとすべて伸長しており、生徒、保護者、教職員にとって、本校が過ごしやすい学校に近づいていることがうかがえる。また、いじめ予防と早期発見についての項目も同様であり、学校が生徒にとって安心・安全な場になってきていることもうかがうことができる。生徒個人々人に応じた指導や多面的評価について尋ねた項目は生徒、教員の9割以上、保護者の約8割が肯定的評価をしており、生徒と教職員との学習活動に対する方向性がマッチしてきていると言える。教職員の観察から、「生徒は授業に落ち着いて取り組んでいる、課題の提出等に意欲が見られる、行動にメリハリが付いた、振り返りをすすんで行っている」など変化を感じることができた。

⑧カリキュラム開発に対するコンソーシアムにおける取組について

本校コンソーシアム（＝コミュニティ・スクール）は、2市1町の首長など各主体において意思決定できる立場の委員が集まっており、本研究開発に係るカリキュラム開発を各主体が支援しやすい体制である。下部組織として3つの部会がある。今年度も学科・系の特徴を生かした魅力的なカリキュラムづくりや今年度新設の学校設定教科・科目「地域協働探究」の在り方について等具体的な意見をいただいた。就業体験実習を行う「地域協働探究」については、産学官連携部会においても具体的な活動内容に関わる協議を行った。また、高大接続部会では閑谷學の意義と取組内容の見直しをすることができ、当初の想定を超える大きな成果があった。

⑨類型毎の趣旨に応じた取組について

令和3年度以降入学学生普通科協働探究系の中心科目となる「地域協働探究」については、2年次に5単位、3年次に6単位の就業体験実習を核とした「地域協働探究 α・β」を全員履修し、就職希望者のみならず大学や専門学校への進学を希望する生徒にとっても、普通教科の授業では学びきれない「体験」を重視した探究要素を持つ授業を履修することにより、学びのモチベーションを高め、将来の職業選択への関連付けや地域協働の意義を見出すことができる。キャリア探求科では、3年次の「課題研究」や流通系2年次の「商品開発」「マーケティング」において、現場実習を行い、商業の視点から社会との繋がりを体験させる。

⑩成果の普及方法・実績について

前述のホームページでの実践報告のほか、県内外の学校訪問受け入れが、オンラインを含めて9校延べ17名あった。

2月の学習成果発表会では外部からの参加は見合わせたが、多くの方に本校の教育活動を知らせるため、本校のYouTubeチャンネルで発表会の様子を公開している。

(URL : https://youtu.be/7-VzZAn_W0k)

また、近隣高校や全国の高校との探究学習交流会（主にオンライン）に延べ12回参加

し、活動発表や意見交換等を行った。

1.1 目標の進捗状況、成果、評価

以下のとおり、目標を達成している項目も多く、進捗状況はおおむね良好である。

3年間の事業の成果は、2市1町を中心としたコンソーシアムとしての学校運営協議会の設置やコーディネーターの配置により支援をしてもらうことで、地域の様々な資源とつながる魅力的なカリキュラムづくりを行うことができたことである。その結果、生徒の主体性・自己肯定感の上昇が上述のアンケート結果からも見られた。

アウトカムではaとcの相関をはかった。aについては閑谷學の3年次最終の自己評価（1月実施）であり、生徒の成長実感が高まり肯定的割合が高くなっているが、実施時期が異なることを差し置いてもcの学力とつながる相関は見られなかった。

<本構想において実現する成果目標の設定（アウトカム）>

- a 各教科・科目、総合的な探究の時間などにおける長期ルーブリックのレベル2以上の割合88%（目標値40%）閑谷學の年度末自己評価の結果。
- b 地元企業（3商工会、1商工会議所加盟）に魅力を感じ、就職する生徒の割合54%（目標値55%）就職者26名中14名が地元企業に就職した。
- c 外部模試におけるGTZのレベルC以上の割合14%（目標値34%）最終外部模試（6月受験）の結果。

<地域人材を育成する高校としての活動指標（アウトプット）>

- a 各教科における研究授業の実施回数3回（6月、11月）（目標値3回）
数学科・理科初任者研修各2回、地歴公民科・家庭科研究授業1回の計6講座で実施
- b 各教科の授業シートのホームページへのアップ回数1回（目標値1回）
- c 外部の研究会・発表会などへの参加回数22回（目標値4回）

<ul style="list-style-type: none">・高等学校魅力化推進事業（リージョナルモデル）連絡協議会（オンライン） 5/27 教員1名、カリキュラム開発等専門家1名、地域協働学習実施支援員1名参加・三重県立紀南高校若手官僚・高校生「日本の未来について語る会」（オンライン） 6/25 生徒2名、教員1名、カリキュラム開発等専門家1名参加・全国高校生まちづくりサミット2021 in 尼崎（オンライン） 8/18～20 生徒6名、教員1名参加・高知県立大方高校探究発表会（オンライン） 9/21 教員1名参加・山陽学園大学地域マネジメントコンテスト（オンライン） 10/3 生徒7名、教員5名参加・「被災地で学ぶ」フォーラム（オンライン） 10/18、11/27 生徒3名、教員1名参加・飛騨市立園部高校オンライントーク～コミュニティ・スクールはこれまでの地域学校転換と何が違うのか？～（オンライン） 11/11 教員1名、カリキュラム開発等専門家1名参加・高校生による岡山の歴史・文化研究フォーラム（さん太ホール） 11/28 生徒2名、教員1名参加・岡山県ユネスコスクール高校ネットワーク実践交流会（オンライン） 11/23 生徒2名、教員3名、地域協働学習実施支援員1名参加・人権学習第1回公開授業（津山東高校） 10/27 教員2名参加・総合的な探究の時間「行学」地域プロジェクト発表会（津山東高校） 12/1 教員2名参加・矢掛高校「やかげが学」発表会（やかげ文化センター） 12/17 教員1名参加・岡山県高校生探究フォーラム（ピュアリティまきひ） 12/27 生徒0名、教員3名参加・岩手県立大館高校（オンライン） 1/12 カリキュラム開発等専門家1名参加・「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」全国サミット（オンライン） 1/20 教員2名、カリキュラム開発等専門家1名参加・全国高校生MY PROJECT AWARD 2021 西日本②オンラインSummit（オンライン） 1/16 生徒2名、教員2名参加・全国高校生MY PROJECT AWARD 2021 西日本①オンラインSummit（オンライン） 1/29 生徒1名、教員3名参加・岡山城東高校課題研究発表会及び研究結果報告会（オンライン） 2/3 教員2名、地域協働学習実施支援員1名参加・「BeLive（ビーライブ）」（動画提出） 2/5 生徒0名、教員2名参加・魅力化事業 倉前観光PBL成果報告会（オンライン） 2/18 教員1名参加・福祉教育文化振興財団助成金を活用した高校生による成果報告会（オンライン） 2/26 生徒1名、教員2名参加・「Well-beingフォーラム」（オンライン） 3/5 生徒2名、教員2名参加
--

<地域人材を育成する地域としての活動指標（アウトプット）>

- a ①本研究開発に参加する外部人材の参加延べ人数161名（目標値93名）
1年次閑谷學28名、2年次閑谷學28名、2年次就業体験実習19事業所、
3年次閑谷學9名、3年次地域協働探究14事業所、研究成果発表会19名、
コンソーシアム関係44名
- ②学校運営協議会の開催回数3回（目標値2回）
- b 就業体験実習の受け入れを希望する地域の事業所数30事業所（目標値40事業所）

<添付資料>目標設定シート

1 2 次年度以降の課題及び改善点

ア コンソーシアム及び各部会

- ・年3回の4つの会議と38名の外部委員は、学校規模に対して大きすぎる組織であった。次年度以降は、学校運営協議会は現在の形を踏襲し、下部組織となる3つの部会は、必要に応じて設置する方向で検討している。
- ・コーディネーター（カリキュラム開発等専門家、地域協働学習実施支援員（支援職員）等）の位置づけや職務要件の整備、雇用の確保（資金確保）が引き続き課題である。

イ 各教科・科目

- ・身に付けるべき資質・能力（＝7つのチカラ）の到達点を生徒教師が共有することで生徒が主体的な学習者となることを狙いとして長期ルーブリックを作成したが、生徒と共有し全員が使えるものとして定着するまでには至っていない。長期ルーブリックは、生徒が卒業までの3年間を見据え、各教科・科目での自分の成長をはかる基準となるものである。今後は、生徒がそれを主体的に活用し、見通しをもつことで生徒が主体的な学習者となることをねらいとしたい。
- ・学校設定教科・科目「地域協働探究」は、授業で行う就業体験実習や地域貢献活動等の地域協働プログラムについて、学校側が願う関係から、地域の関係者と理念を共有し「ともに育てる」関係を構築し、持続可能な体制へと変容するまでには至っていない。今後は地域協働の実績を積み重ねて、学校と地域が相互に関わり合える関係を築きたい。

ウ 閑谷學

- ・地域での実践を伴う探究は本校の特徴であり、ほぼすべての生徒が何らかの実践を行っているが、アクションが地域を動かす例は稀である。「探究活動に関わる地域関係者の変容」については、学校と地域が理念や目標を共有することと同時に、さらに深い関わりが生まれるよう、コーディネーターの確保・活用を含め検討する必要がある。
- ・各教科・科目や閑谷學で学習した内容を実践や検証する場として多くの課外活動を行っている。引き続き、学校全体で横断的な取組を実施できるようにしたい。

全体としては活動の持続可能性が課題である。コンソーシアムをさらに有機的に運営することや、コーディネーターの雇用の維持、関わりの強化を行い、魅力的なカリキュラムの継続・改善をはかって、地域・学校・生徒・保護者などステークホルダー全体の満足度を向上させていく必要がある。本校では、生徒数の減少という問題に直面しており、本校で学ぶことの魅力を地域にどう伝えていくかが課題となっている。コンソーシアムを核に、学校と地域が一体となり、まずは現在在学中の生徒たちの生き生きとした学びと進路保障に尽力し、本校が地域にとってなくてはならない学校であるという証明を、生徒の姿から発信していきたいと考えている。より地域に密接した活動を続けて、地域ニーズを反映した、選ばれる学校にしていきたい。

【担当者】

担当課	岡山県教育庁高校教育課 高校魅力化推進室	T E L	086-226-7825
氏 名	神田 慶太	F A X	086-224-2535
職 名	主任	e-mail	miryoku@pref.okayama.lg.jp